

Robert E. Park, "The Urban Community as a Spatial Pattern and a Moral Order," in Ernest W. Burgess ed. *The Urban Community: Selected Papers from the Proceedings of the American Sociological Society 1925*. Chicago: University of Chicago Press. 1926.

空間的パターンと道徳的秩序としての都市コミュニティ¹⁾

ロバート・パーク
(松本康訳)

30年ほどまえ、コペンハーゲンのユージェニアス・ウォーミングは、『植物群落』(Plantensamfund)と題した小冊子を出版した。ウォーミングの所見は、種の異なる植物がかれが群落と呼ぶ永続的な集団を形成する傾向があるという事実をうながすものであった。植物群落は、生きた有機体の特徴を非常に多く示すものであることがわかった。それらは、ゆっくりと出現し、ある特徴的な変化を経過し、最終的には崩壊して、非常に異なった種類のべつの群落に遷移する。その後、こうした所見は、それ以降「生態学」という題目のもとでなじみ深くなった一連の研究の出発点となった。

生態学は、地表をおおう植物と動物のじっさいの分布を記述しようとするかぎりにおいて、あるきわめて真の意味において、地理科学である。しかし、人間生態学は、社会学者がこの用語を使用したいと考えているものとしては、地理学と同一のものではなく、人間地理学(human geography)と同一のものでさえない。われわれにとって最も関心があるのは、人間ではなくてコミュニティであり、人間とそれが住む大地との関係ではなくて、他の人間との関係である。

あらゆる自然地域の境界内で、人口の分布は、明確で典型的なパターンを帯びる傾向がある。すべての地域集団は、多少とも、それを構成する個人諸単位の明確な集まり(constellation)である。この集まりがとる形態、換言すれば、他のあらゆる個人との関連におけるコミュニティ内のあらゆる個人の位置は、それを一般的な用語で記述できるかぎりにおいて、デュルケームとかれの学派が社会の形態的側面と呼んだものを構成する²⁾。

社会学者の考える人間生態学は、地理よりも空間を強調しようとする。社会においてわれわれはたんにいっしょに生活しているだけではなく、同時に、分かれて生活している。そして、人間関係はつねに、多少とも正確に、距離との関連において計算されている。社会構造が位置との関連で定義できるかぎり、社会変動は運動(movement)との関連で記述できるだろう。そして、社会は、その一側面において、数学的公式において測定され記述される諸特徴を示す。

1) 会長講演

2) 地理学者は、そのようなものとしての社会形態学に、おそらくそれほど大きな関心をもたないだろう。他方、社会学者は関心をもつであろう。地理学者は、歴史学者と同様に、伝統的に典型的なものよりも現実的なものに関心を示してきた。事物はどこにじっさいに位置しているのか。なにがじっさいに起こったのか。これらは、地理学と歴史学が答えようとしてきた問いである。A *Geographical Introduction to History*, by M. Lucien Febvre and Lionel Bataillon を参照。

地域コミュニティは、それらが占める区域との関連において、そして、それらの区域内の人口分布の相対的密度との関連において、比較できよう。しかし、コミュニティは、たんなる人口凝集体ではない。都市、とくに大都市は、人口の選択淘汰と凝離（segregation）が最も進んでいるところであるが、より小さな人口凝集体において見いだせないある形態学的な特徴を示す。

規模に付随するもののひとつは、多様性である。他の条件が等しい場合、コミュニティの規模が大きければ大きいほど、分業の幅は大きくなるだろう。数年前の『紳士録』に掲載された著名な人びとの氏名を調べたところ、大都市（シカゴ）においては、センサスに掲載された509の職業に加えて、116のべつの職業が専門職として分類されていた。遂行のために特別で科学的な訓練を必要とする専門職の数は、コミュニティの知的生活を示す指標であり測定尺度である。あるコミュニティの知的生活は、たんに平均的な市民の学業の達成によってだけでなく、また地域社会の知能指数によってでもなく、共同問題——たとえば、保健、産業、社会統制——の解決に合理的方法が適用される程度によって測定される。

都市がつねに知的生活の中心地であったひとつの理由は、都市が、仕事の個人化と多様化を可能にただけでなく、それを余儀なくさせてきたからである。あらゆる個人が自分の注意を共通の人的経験のある小さな領域に集中させることを可能にし、それを強いる場合にのみ、そしてかれが自分の努力を共通の仕事のある小さな部分に集中させることを学ぶ場合にのみ、文明が必要とする広範な協力が維持される。

1922年にワシントンで開催されたアメリカ社会学会大会で発表された興味深い示唆的な論文のなかで、バージェス教授は、都市の成長に関わる過程を素描した。都市の成長は、通常、テリトリーの拡張と数の増大との関連で記述されてきた。都市それ自体は、行政的な区域、自治体と見なされてきた。しかし、われわれがここで関心のある都市は、公式的で行政的な実体ではない。それはむしろ、自然の諸力の産物であり、政治的・行政的目的のために課された境界とは多少とも独立に、それ自身の境界線を拡張する。このことは、経済的単位あるいは社会的単位としての都市のいかなる徹底的な研究であっても、公式的ではなく自然的な都市の境界線を考慮する必要性を見いだしてきたという事実が認識される程度にまでなってきた。それゆえ、ラッセル・セージ財団の指揮のもとにあるニューヨーク市の都市計画研究においては、ニューヨーク市は5,500平方マイルのテリトリーを含み、その面積のなかに、100のより小さな行政単位、つまり都市と村のようなものを含み、総人口が900万人となる。

われわれは、都市の成長をたんなる凝集によって生じたものと考えてきた。しかし、都市地域内部におけるいかなる地点の人口増加も、都市の他のあらゆる部分に必然的に反映し感じとられている。都市のある部分におけるそのような人口の増加が、他のあらゆる場所に反映する程度は、地域運輸体系の性格におおいに左右される。都市の周辺部を中心部に結びつける運輸手段のあらゆる延伸と増大は、より多くの人口をより頻繁に中心業務地区にもたらす傾向がある。このことは、中心部の混雑を増加させる。それは、結局、オフィスの高さとこれらのビルが建っている地価を上昇させる。業務中心地の地価の影響は、その地点から都市のあらゆる部分にまで、放射状に広がる。中心部の成長が急速であれば、それは、中心のちょうど外側にある、投機目的で保有された地域の直径を拡大させ

る。投機のために保有された不動産は、通常、劣悪化させたままにしている。それは、容易にスラムの特徴を帯びる。つまり、一時的で、一過的な人口の地域、汚く無秩序な地域、「伝道と失われた魂」の地域である。これらの、無視された、ときには放棄された地域は、移民の最初の居住地となる。ここにあるのは、われわれのゲットー、そして、ときには、ボヘミア、グリニッジ・ビレッジ、つまり芸術家とラジカルが根本主義とロータリークラブ主義、そして一般に俗物の世界の限界と制限から逃れようとしている場所である。すべての大都市には、そのウォール街があるように、そのグリニッジ・ビレッジがある。

都市の成長は、たんに数が付け加わるだけではなく、それに付随する変化と移動のいっさいが含まれ、それは必然的に、あらゆる個人が、都市生活の広範な複雑性のなかで自分の場所を見つけようとする努力と結びつく。新しい地域の成長、専門職と職業の増加、都市の拡張がもたらす地価の付随的な上昇——こうしたいっさいは、都市成長の過程に関わっており、他の諸個人およびコミュニティ全体との関連での個人の位置の変化によって測定可能である。地価は、たとえば、人口の移動性との関連で計算できる。最高の地価は、最大数の人びとが 24 時間の経過のなかで通り過ぎる地点に存在する。

コミュニティは、それを構成する諸個人と区別されるものとして、無限の寿命をもつ。われわれは、コミュニティが出現し、しばらくのあいだ拡大し反映し、つぎに衰退することを知っている。このことは、植物群落に当てはまるのと同じように、人間社会にも当てはまる。われわれは、これらの変化のリズムをまだ正確には知らない。そして、このことは、個人とコミュニティの利害に必然的で永続的な葛藤があるように見えるひとつの理由である。これは、安定しているか衰退過程にある都市よりも、成長中の都市で、警察活動により大きな費用がかかるひとつの理由である。

あらゆる新しい世代は、おもにより古い世代によって定義され維持されている秩序に順応することを学ばなければならない。あらゆる社会は、ある種の規律をその成員に課す。諸個人は成長し、コミュニティの生活に組み込まれ、結局は、脱落して消えていく。しかし、コミュニティは、それが体現している道徳的秩序とともに、生き続ける。それゆえ、コミュニティの生活は、一種の新陳代謝を含んでいる。それは、定常的に、新しい諸個人を同化し、徐々に、死やその他によって、古い諸個人を取り除いていく。しかし、同化は単純な過程ではなく、とりわけ、時間を要する。

自国生まれの者を順応させる問題は、非常に現実的なものである。それは、家庭における子どもの教育と、学校における青少年の教育の問題である。しかし、成人の移住者の順応は、かれらに共同的組織における場所を見つけてやることであり、もっと深刻な問題である。それは、成人教育の問題であり、われわれは近年になって、その重要性を現実的な意味で考え始めたばかりである。

われわれがほとんど考えてこなかった状況のべつの側面がある。出生が死亡を上回るために人口が増加するコミュニティと、移住のために人口が増加するコミュニティは、重要な違いを示す。成長が移民によるところでは、社会変動は必然的により急速でより深い。たとえば、地価はいっそう急速に上昇する。建物と機械の取り替え、人口の移動、職業の変化、富の増大、そして社会的位置の逆転は、もっと急速なテンポで進行する。概して、社会は、いまではフロンティアの特性として認識されている状態に近づく。

大きく急速な変化が進行中の社会においては、われわれが通常、公共の新聞、および討

論と会話をつうじて獲得する種類の公教育の必要性がより大きい。他方で、もっと体系的な科学の研究だけでなく、最終的には常識にもとづく個人的な所見と伝統も、諸条件の変化について行くことができないので、オグバーンが「文化的遅滞」現象として記述してきたことが生じる。われわれの政治的知識と常識は、われわれの共通の生活に生じている現実の変化に追いついていない。ことによると、その結果は、公衆が漂流していると感じるにつれて、法律の制定は増殖するが、じっさいの統制は減少する、ということだ。それゆえ、公衆が法律制定の無益性を理解すると、そこにはもっと激しい行動への要求がある。それは、明確でない大衆運動と、しばしば、たんなる暴徒の暴力に表明される。たとえば、南部の州におけるリンチと、北部における人種暴動である。

これらの無秩序が、なんらかの意味で、人口移動と関連しているかぎり、——そして、人種暴動とリンチに関する近年の研究がそうであることを示しているが——、われわれが社会的新陳代謝として記述してきたものの研究は、人種暴動の現象の、説明にはならないにしても、指標を提供するかもしれない。

コミュニティの成長に付随するもののひとつは、人口の社会的選択淘汰と凝離であり、一方で自然的社会集団、他方で自然的社会地域の発生である。われわれは、この凝離過程を、移民の場合に、とくにいわゆる歴史的人種、すなわち移民であろうとなかろうと人種的標識によって区別される人びとの場合に、気がつくようになった。チャイナタウン、リトル・シンリー、そして都市生活の研究者がよく知っているその他のいわゆる「ゲットー」は、都市の諸条件と諸傾向が必然的に生みだすもっと一般的な種類の自然地域の特殊タイプである。

このような人口の凝離は、第一に、言語と文化にもとづいて生じ、第二に、人種にもとづいて生じる。しかし、これらの移民の居留地と人種的ゲットーの内部で、選択淘汰のべつの過程が必然的に起こり、職業的な利害、知能、そして個人的野心にもとづく凝離をもたらす。その結果、もっと鋭敏で、もっと精力的で、もっと野心的な者が、たちまちかれらのゲットーや移民の居留地から出現し、第二の移民居住地域に移動するか、ことによると、いくつかの移民集団と人種集団の成員たちが出会い、隣り合って暮らすコスモポリタン地域に移動するかもしれない。ますます、人種、言語、文化の紐帯が弱まるにつれて、成功した諸個人が出てきて、最終的に、言語や人種集団との同一視をやめたより古くからの人口集団のなかで、実業と専門職に自分たちの場所を見いだす。要点は、職業の変化、個人的な成功や失敗——要するに経済的・社会的地位の変化——は、居場所 (location) の変化に記録される傾向がある。コミュニティの物理的あるいは生態学的組織は、長期的には、職業的組織、文化的組織に反応し、これらに反映する。社会的選択淘汰と凝離は、自然集団を生みだすものであるが、同時に、都市の自然地域を決定する。

近代都市は、ある重要な点で、古代都市とは異なる。古代都市は、砦の周辺に成長した。近代都市は、市場の周辺に成長した。古代都市は、相対的に自給自足的な地方の中心であった。生産された財は、主として、自家消費であり、地域コミュニティの境界を越えた交易向けではなかった。他方、近代都市は、非常に高度に専門分化した生産をしている地方の中心であることが多く、それに対応して広い範囲にわたる交易地域をもっている。こうした状況のもとで、近代都市の主要な輪郭は、(1) 地元の地理と(2) 運輸ルートによって決定されるだろう。

地元の地理は、必然的にそのすべてがより大きな産業と結びついている鉄道と他の主要な運輸手段によって修正され、都市計画の大枠を提供する。しかし、これらの大枠は、人口と、中央の小売業地域を中心とする諸機関というもうひとつのべつの分布によって重ね合わせられ修正される。この中央の商業地域じたいのなかに、ある形態の業務、店舗、ホテル、劇場、卸売店、業務ビル、そして銀行が、すべて明確で特徴的なパターンに分類される。それはあたかも、その地域におけるあらゆる形態の業務と建物の位置が、他のすべてのものとの関係によっていくらか固定され決定されているかのようである。

都市の周辺部に出ると、ここでも、産業用郊外と居住用郊外、ベッドタウン、そして衛星都市が、ある自然で不可避的なやり方で、それらのあらかじめ決められた場所を見つけているように思われる。一方で中心業務地区によって、他方で郊外によって境界づけられた地域の内部では、都市は一連の同心円の形態をとりがちである。中心から異なる相対距離にあるこれらの異なる地域は、人口の移動性の違いによって特徴づけられる。

最も移動性の高い地域、つまり人口の運動と変化の地域は、当然、業務中心地そのものである。ここには、ホテル、つまり短期滞在者の居住場所がある。これらのホテルにいる少数の永続的居住者を除けば、卓越した意味での都市である業務中心地は、毎晩、空^{から}になり、毎朝、満杯になる。言葉の狭い意味での都市の外側には、臨時雇い労働者の居住場所であるスラムがある。スラムの端には、「下宿屋街」として特徴づけられる、すでに沈下過程にある地域があることが多く、そこは、ボヘミアン、あらゆる種類の短期的冒険者、そして定住しない若い男女の居住場所である。そこを越えると、アパートメント地域がある。小規模家族とデリカテッセンの店がある地域だ。最後に、他のすべてのものを越えたところに、複式アパートメント地域と戸建て住宅地域がある。そこでは、人びとはまだ自分の家をもち、たしかにスラムと同じように、子どもを育てている。

典型的な都市コミュニティは、じっさいには、この記述が示すものよりもずっと複雑で、都市のタイプと規模によって特徴的な違いがある。しかし、主要な点は、コミュニティはどこでもあるパターンにしたがう傾向があり、このパターンは必然的に典型的な都市地域の集まりとなり、そのすべては地理的に配置され、空間的に限定されるということである。

自然地域は、自然集団の生息地である。すべての典型的な都市地域は、コミュニティ全体の人口の特徴的な選択淘汰を含むことが多い。大都市において、慣習、生活標準、そして一般的な生活観が、都市地域によって異なっていることは、しばしば驚くほどである。性別と年齢集団の違いは、ことによると社会生活を示す最も有意義な指標であるが、自然地域の違いによって著しく異なっている。都市には、たとえば、ほとんど子どものいない、居住用ホテルによって占められている地域がある。子どもの数が相対的にとても多い地域もある。スラムや、中産階級の居住用郊外である。中産階級の居住用郊外は、通常、新たに結婚した者が、都市にある最初の新婚期アパートから卒業してくる場所である。このほかに、若い未婚の人びと、独身男女によって完全に占められている場所もある。全国選挙を除いてほとんど投票しない人びとのいる地域もある。離婚率が米国のいかなる州よりも高い地域もある。そして、同じ都市のべつの地域では、ほとんど離婚がない。少年のギャングと、これらのギャングの成員あるいはギャングそのものが卒業して入ってくるアスレチック・クラブと政治クラブがはびこっている地域もある。自殺率の過剰な地域もある。統計の記録によると、少年非行の量が過剰な地域もあれば、ほとんどない地域もある。

これらのいっさいは、社会現象を測定し、記述し、最終的には説明するための指標として、場所、位置、移動性が重要であることを強調している。ベルグソンは、移動性を、「われわれが動きだけを単独で考えるとき、いわば、動きからわれわれが移動性を抽象するときに動きについてわれわれが形成する観念」と定義した。移動性は、社会変化と社会解体を測定する。なぜなら、社会変化は、ほとんどつねに、空間における位置の変化を付随的にともなっており、あらゆる社会変化は、われわれが進歩と述べるようなものでさえ、ある社会解体をともなっている。すでに言及した論文で、バージェス教授は、さまざまな形態の社会解体は、移動性との関連で測定できる都市生活における変化とおおまかに関連しているように思われると指摘している。これらすべては、さらなる洞察を示唆している。社会の研究者が通常、関心をもつ多くのことは、空間における位置、分布、そして運動に密接に関係していると思われるので、われわれが通常、社会的にとらえるもののいっさいを、結局は、空間との関連、および自然地域の境界内、換言すれば競争的協同の地域の境界内での諸個人の位置の変化との関連で解釈し記述することは、不可能ではない。このような興味深い諸条件のもとで、あらゆる社会現象は、結局は、測定の対象となり、社会学はじっさいに、ある人びとがやろうとしてきたこと、すなわち統計学の一分野となるだろう。

社会現象の記述と説明のこのような構想は、事実をあまりに単純化することなしに実行できるのであれば、たしかに社会学の根本的な論理的・認識論的問題のいくつかをうまく解決することになるだろう。すべての社会的諸関係を空間の諸関係に還元すれば、人間の諸関係に物理学の根本的な論理を適用することができるだろう。社会現象は、諸個人の要素的な運動に還元されるだろう。それはちょうど物理的現象、化学的作用、そして物質、熱、音、電気の質が分子と原子の要素的な運動に還元されるのと同じである。

困難なのは、物質の動力学理論において、諸要素は変化しないと仮定されていることである。このことは、もちろん、要素とか要素的という言葉でわれわれが意味していることである。物理学が考慮に入れている唯一の変化は、空間における変化であるから、すべての質的差異は、量的差異に還元され、それゆえ数学的な用語で記述される。他方、人間の社会的諸関係の場合、要素的な単位——すなわちこうした異なる組み合わせに入る個々の男女——は、周知のとおり変化にさらされる。それらは、同質的な単位を表しているどころではないので、それらを完全に数学的に扱うことは、不可能であるように思われる。

ジョン・デューイ〔プラグマティズムの哲学者、ミシガン大学、のちにシカゴ大学教授。パークはミシガン大学でデューイに学んでいる〕が述べたように、社会は、コミュニケーションのうちに、コミュニケーションをとおして、存在する。そしてコミュニケーションは、たとえば、暗示や模倣——これらは、社会学者が何度も、すべての社会現象を還元しようとしたもののふたつである——において、個々の社会的単位のあいだに生起すると思われるような、エネルギーの変換に関与しているのではなく、むしろコミュニケーションは、このようにコミュニケーションする諸個人の変容に関与している。そして、この変容は、個々の精神（mind）における個々の経験の蓄積をともなっており、絶え間なく進行している。

もし、人間の行動が、何人かの心理学者がそうしようとしてきたように、さらに数少ない要素的な本能に還元可能であるとすれば、物理諸科学の動力学諸理論を社会生活に適用することも、それほど難しいことではないであろう。しかし、たとえ、そうした本能が

存在すると言われるとしても、それらは記憶と習慣の蓄積によってつねに変化の過程にある。そしてこれらの変化は、あまりにも大きく継続的であるので、個々の男女を一定の同質的な社会的単位として扱うことは、あまりに大きな抽象に関わることになる。これこそ、われわれが最終的に、人間の行為と社会の説明において、心理学に駆り立てられる理由である。社会において生起する変化を理解可能にするためには、社会を構成していると思われる個々の単位に生起する変化を考慮することが必要である。その結果、社会的要素は個人であることをやめ、態度、すなわち個人の行為の傾向になる。個人ではなく態度が、相互作用して、社会組織を維持し、社会変化を生み出す。

この概念が意味しているのは、地理的障壁と物理的距離が社会学にとって重要であるのは、それらがコミュニケーションと社会生活をじっさいに維持する条件を規定している場合と場所においてのみであるということだ。しかし、人間の地理は、人間の発明によっておおいに修正されてきた。電信、電話、新聞、ラジオは、世界をひとつの広範なひそひそ話の回廊に転換することによって、距離を解消し、かつては人種と人びとを分け隔てていた孤立を打ち破った。コミュニケーションの新しい装置は、しだいに社会的諸関係を増殖させ、それにともなって複雑にしている。コミュニケーションの歴史は、非常に現実的な意味で、文明の歴史である。言語、文字、印刷機、電信、電話、そしてラジオは、人類の歴史において画期的である。しかし、これらは、ますます広がる分業をとまなうことがなかったならば、現在の意義の多くを失っていたであろうということを言うておく必要がある。

私は、社会はコミュニケーションのうちに、コミュニケーションをとおして存在すると述べてきた。コミュニケーション手段によって、諸個人は、共通の経験を分かち合い、共通の生活を維持する。そもそも、コミュニケーションを制限しあるいは促進する地理と他のあらゆる要因が、社会の構造と組織に入ってくるといえるのは、コミュニケーションが社会の存在にとって根本的であるからである。こうした状況のもとで、位置、距離、移動性の概念が新しい意義をもつようになる。移動性は、新しい社会的接触を保証するかぎりにおいてのみ、社会学的概念として重要である。そして、物理的距離は、社会的距離との関連において解釈可能である場合にのみ、社会関係にとって意義がある。

社会有機体——そしてこれは、社会有機体についての最も根本的で当惑させられることのひとつであるが——は、移動できる単位から作られている。各個人が空間を移動できるという事実は、自分自身にとって私的で特異な経験を保証する。そしてこの経験は、個人が空間のなかでの冒険の過程で獲得するものであるが、それが特異なものであるかぎり、独立した個人の行為のための観点を提供する。個人を最終的に人格 (person) に構成するのは、特異な経験を個人が所有し意識することであり、それとの関連で考え行為する傾向である。

子どもは、その行為が主として反射によって決まるので、最初はそのような独立性と個性をもち、事実として、人格ではない。

コミュニケーションを必要とし、合意を可能にするのは、この個々の人間の経験における多様性である。もしわれわれが、つねに似たような状況に似たようにやり方で反応したのであれば、私の理解するかぎり、コミュニケーションの必要はなく、抽象的で反省的な思考の可能性もない。知識へ要求は、まさにこれらの多様な個人の経験を点検し提供して、

われわれすべてがそれらを理解できるような用語に還元する必要性から生じる。われわれの個人的感情の不明瞭な表現を、論議の共通領域に還元し、われわれの私的な経験から、客観的で理解できる世界を創造することが、科学の仕事である。

われわれは、おのおのが、自分たちの私的な経験をもっているだけでなく、われわれはそれらの経験を鋭く意識しており、それらを侵害と誤解から守ることにおおいに関心をもっている。われわれの自己意識は、これらの個人の経験が異なっているという意識であり、それらが究極的には伝達不可能であるという意識をともなっている。これがわれわれの、個人的、人種の慎み深さの基礎である。それはまた、われわれの意見、態度、そして偏見の基礎でもある。もし、われわれにとって個人的であるとみなされるもののいっさいを、だれもが文字どおりに受け取ることができるということに、われわれが確信をもてるのであれば、言い換えれば、われわれが子どもと同じくらいに素朴で、あるいは、他方で、ヒステリー患者と同じくらいに暗示的で、慎みを欠いているのであれば、われわれにはおそらく人格も社会もないであろう。なぜなら、ある孤立と、社会的影響力と社会的暗示に対する抵抗は、健全な社会の条件であると同じくらい、健全な個人的存在の条件であるからだ。プライバシーなしの人格が考えられないのは、人格のない社会が考えられないのと同じである。

それゆえ、空間だけがコミュニケーションの障壁ではないこと、そして社会的距離が純粹に物理的な関連においてつねに適切に測定できるとはかぎらないことは明白である。コミュニケーションの最終的な障壁は、自己意識である。

われわれが見知らぬ人の前でしばしば感じるこの自己意識、この慎み、この恥ずかしさの意味とは何であろうか。それは身体的暴力への恐れであるとは限らないことはたしかである。それは、われわれがよい印象をあたえないだろうという恐れであり、われわれが最善に見えていないという恐れであり、自分自身についての自分たちが抱く概念にそって生きることができないだろうという恐れであり、とくに、他の人びとがわれわれについて抱いて欲しいと思っている概念に沿ってわれわれが生きることができないという恐れである。われわれは、この恥ずかしさを、自分自身の子どもをまえにして経験する。われわれが完全にリラックスでき、完全にみっともなく、気楽にできるのは、われわれの最も親密な友人のまえにおいてである。間違いなく、こうした状況のもとにおいてのみ、コミュニケーションは完全なものとなり、個人を隔てている距離は完全に解消する。

われわれがみな、ある種のプライバシー、個人的尊厳、そして落ち着きを維持しようとする、こうしたコミュニケーションと「距離化」の世界は、動的な世界であり、それ独自の秩序と特性をもっている。この社会的・道徳的秩序において、われわれのおのおのが自分自身について抱いている概念は、他のすべての個人が、同じ限界をもつコミュニケーションの世界で、自分自身と他のすべての人びとについて抱いている概念によって限定されている。その結果は——これは、いかなる社会においても当てはまることであるが——、すべての個人が地位を求める闘争において自分自身を見つけるということである。それは、個人的な威信、自分の見解、そして自尊心を保持するための闘争である。しかし、かれがそれらを維持することができるのは、他のすべての人の評価、つまり、かれの集団や社会にいる他のすべての人の評価が重要であるという認識を自力で獲得できるかぎりにおいてのみである。地位を求めるこの闘争から避難することを発見した人生哲学はまだない。な

んらかの社会において、自分の地位に関心のない個人は、世捨て人である。たとえかれの隠遁場所が都市の群集であったとしてもそうである。自分自身についての概念が、他の人びとがかれに抱いている概念によってまったく決定されていない個人は、おそらく正気ではない。

結局、われわれが住んでいる社会は、必然的に、個人の位置が、パーソナリティの中核である自分自身についての概念だけでなく、他の諸個人の態度と集団が保持している標準によっても決定されているような、道徳的秩序であることがわかる。そのような社会において、個人は人格になる。人格とは、たんに、なんらかの社会において、どこかに社会的地位をもった個人である。しかし、地位は、結局、距離——社会的距離——の問題になる。

空間的諸関係が、社会と人間的性質の研究にとって、じっさいに重要性をもつのは、地理、職業、そして人口分布を決定する他の諸要因が、否応なく宿命的に、われわれのおのおのが生活しなければならない場所、集団、そして交際相手を決定するからである。

統計が社会学にとって、なんであろうとなんらかの重要性をもつのは、社会的諸関係がこれほどしばしば、これほど必然的に、空間的諸関係と相関するからであり、物理的距離が、これほどしばしば、社会的距離の指標になり、あるいは指標になるように思われるからである。そして、このことが最終的に真実となるのは、社会的・心理的事実が空間的事実に還元できるか、相関しているの場合にのみ、それらをそもそも測定することができるからである。